

論壇時評

中嶋嶺雄

上

中嶋根首相が訪米し、日米関係が一段落ついたにもかかわらず、では先般の日米首脳会議で日米双方は本音で理解し合えるようになったのだろうか、という懸念が沈黙していた。

本音で語る日米関係

▲京極純一・村上泰亮・古森義久の共同討議など
森永和彦「石油産油国の凋落」など▼

『逆オイルショック』論議盛ん

文化



樹田 達雄・画

独経済を再興できるか」をめぐり、「朝日ジャーナル」(三月十八日号)にはウィリー・クラウス(西独ルーヴル大学教授)と和田俊との対談「西ドイツの選挙分析」と、緑の党指導者ベトラ・ケリー女史への緊急インタビューがある。

『大筋において健全な判断力』と高坂氏
西ドイツの総選挙は、コ

ボンに在住する仲井城は、「緑の革命」(世界)で、緑の党の進出の背景を描写し、「西ドイツの総選挙が示したものの」(エコノミスト)三月二十九日号)では、保守、中道連合の勝利の原因を分析している。

保守中道連合政権の勝利、野党の社会民主主義の大敗に終わった半面、環境保護と反核・平和運動をかかげた「緑の党」という「反政党的政党」(ケリー女史)の躍進によって印象づけられた。また、選挙結果に世界の関心が集まっていたのは、いつまでもなく、今日の米ソ新冷戦下での西ドイツの選択が重要な国際的意味をもっていたからである。

原油値下げによる世界経済への影響

国際問題では、なんといつても今月は、石油価格引き下げによるいわゆる「逆オイルショック」に議論が集中していた。森永和彦「石油産油国の凋落」(自由)は、石油危機以来のOPEC諸国の栄枯盛衰を「お

れる者久しからず」だと見做し、一方、中道連合「逆オイルショックの波」(経済往来)は、「第三次石油ショック発生の可能性は、逆石油ショック下の将来に対する根拠なき希望の観測の中で着々と進行している」と警鐘を鳴らしている。

ソ連月刊誌が井上靖「闘牛」など紹介

市川真紀夫「原油値下げを喜んでいるか」(V.O.V.O.)も「安価な石油は日本だけでなく欧米をも再び高度成長路線へ復帰させるであろうが、その行き着く先には前回よりもいっそう深刻な石油危機の壁が立ちはだかっている」と展望している。

ソ連の月刊誌「外国文学」の誌の「外国文学」が、長編を主体にしているところから、中、短編の紹介のため昨年から始められたもので、七十九国の代表作の作品紹介を予定。その第一冊が井上靖の作品集「闘牛」。「比良」のシャクナゲ。訳者は赤リスだったわけで、「日本文学愛好家である私にはとてもうれし」とニコライ・フェドレンコ。

原油値下げの効果は必ずしもものなから、「逆・オイルショック」ではあっても「逆オイル・ショック」はあり得ない。と見做している言は、「石油値下げ下の経済政策の選択」(週刊東洋経済)三月二十六日号と題する提言で、むしろ「逆オイルショック」のベネフィットを活かしながら、第三次石油危機回避のエネルギー価格政策を探り当てる「べき」ことを具体的に説いている。吉野と小山

第十四回講談社出版文化賞は、このほぐの通り決まった。賞金は各三万円。贈呈式は五月十二日東京・紀尾井町のホテルニューオータニ。【さしえ賞】須田利太郎司

講談社出版文化賞